

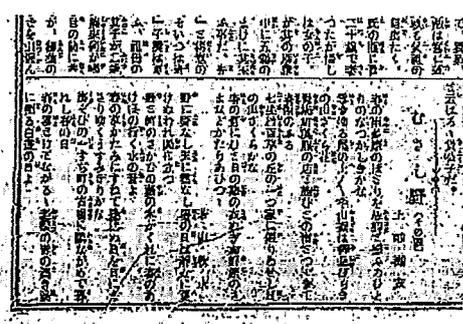
多摩のほとり物想い

文人の 武蔵野

1907年(明治40年)2月24日、土岐善麿が湖友名で発表した「むさし野」短歌である「春の雨多摩のほとりを故郷と恋ふるひとりのなつかしきかな」には、故郷が詠まれています。

土岐の故郷が「多摩のほとり」だったわけではありません。浅草の寺院で生まれ育った土岐は、大東京が胎動する渦中にいました。関東大震災前の浅草は銀座をしのぐ都市

若山牧水と土岐善麿 ③



1907年2月24日の本紙文芸付録に掲載された牧水と土岐「むさし野」の短歌小欄

空間でした。他方で若山牧水は、山の国日向(現在の宮崎県)に生を

享け、「太平記」や「伊勢物語」を通してまた見ぬ武蔵野に想いをはせる文学青年でした。土岐の回想によると(佐藤緑葉を加えた3人は)「ほとんど毎日顔をあはせては一緒に武蔵野を散歩した」といいます。愛読していた万葉集と唐詩選と独歩の武蔵野について語り合う日々が想像されます。

佐藤もまた現在の群馬県からの上京青年でした。親しい文学仲間の中では土岐だけが武蔵の国の人だったようです。土岐にとつての「多摩のほとり」は独り歩いて物想いに耽る場所だったのでしようか。あるいは、万葉集の東歌「多摩川にさらす手作りさらさら」に何ぞこの児のこ(こ)だ愛しき」(3373)を想起し心惹かれて懐かしさを感じた

のでしようか。

牧水とは異なり、土岐の「むさし野」短歌には地名が刻まれます。「七生村百草の丘の一つ家に假りあせし日の山ざくらかな」で詠んだ百草園は、牧水お気に入りの武蔵野でしたが、先に歌にしたのは土岐でした。

(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・十屋忍)

おすすめの1冊

「伊勢物語」

牧水が愛読し武蔵野に想いをはせた「伊勢物語」は、平安時代の歌物語集です。作者不詳、書名の由来も不明、主人公は在原業平だと思われませんが、その名は明記されません。「をとこ」と女性たちとの恋愛遍歴が描かれ、十二段では武蔵野が罪の恋の舞台となります。



(岩波書店提供)